

ミャンマー連邦共和国サッカートップレベルチーム選手の 競技力向上に関する研究 —心理的競技能力に着目して—

松山博明¹⁾・堀野博幸²⁾・須田芳正³⁾・福士徳文³⁾
馬込卓弥¹⁾, 辰本頼弘¹⁾, 巽樹理¹⁾

(追手門学院大学)¹⁾

(早稲田大学)²⁾

(慶応大学)³⁾

Improvements in performance of Republic of
the Union of Myanmar Soccer Top Level Team Players
—Focused on the Psychological-Competitive Abilities—

Hiroaki MATSUYAMA, Hiroyuki HORINO, Yoshimasa SUDA,
Norifumi FUKUSHI, Takuya MAGOME,
Yoshihiro TATSUMOTO, Juri TATSUMI

(OTEMON GAKUIN UNIVERSITY)¹⁾

(WASEDA UNIVERSITY)²⁾

(KEIO UNIVERSITY)³⁾

抄 録

本研究では、2018年シーズンミャンマーサッカー史上初の国内3冠を達成し、代表チームの主力選手が多く所属している国内トップレベルチーム選手の心理的競技能力診断検査 (DIPCA.3) を実施した。また、日本サッカー選手の競技レベル別にみたDIPCA.3の分類比較から考察することを目的とした。その結果、ミャンマーは、日本サッカー選手の競技レベル別にみたDIPCA.3 (Jリーグ・JFL/地域リーグ・都道府県リーグ) の分類比較から (堀野, 2021), 総合得点では、JFL/地域リーグレベルに属していた。また、ミャンマーは、12因子別から比較すると忍耐力、闘争心、自己実現意欲、自信、決断力、予測力、判断力、協調性がいずれのカテゴリーレベルと比較しても高数値であった。しかしながら、勝利意欲、自己コントロール、リラックス、集中力が低数値であることが明らかになった。

Keywords : ミャンマー, サッカー, トップレベル, 選手

1. 緒言

ミャンマー連邦共和国（以下：ミャンマーとする）は、東南アジアのインドシナ半島西部に位置する共和制国家である。諸部族割拠時代を経て11世紀半ば頃に最初のビルマ族による統一王朝（バガン王朝、1044年～1287年）が成立した。その後、タウンゲー王朝、コンバウン王朝等を経て、1886年に英領インドに編入され、1948年1月4日に独立した。独立した1948年から1989年までの国名はビルマ連邦、通称ビルマと呼ばれていた（外務省、online）。また、ミャンマーはASEAN10カ国の中で最も西方かつ北方に位置しており、国土面積は東南アジア最大の676,577平方キロメートル（日本の約1.8倍）を有する。国土の中央部で最大925キロメートルと東西に大きく広がっており、国土は細長い菱形のような形状となっている（内田、2016）。国土は、日本の約1.8倍、人口はASEANでタイに次ぐ第5位の5,148万人を誇り、かつ平均年齢27歳（いずれも2014年国勢調査）と若く、経済成長を支える労働力の供給は、2030年代まで安定しているとみられ、経済発展の潜在性が高く、将来的な消費市場の主役としても成長が期待される（ミャンマーについて、online）。また、スポーツにおいてもスポーツ省が1997年に設立されるなど力を注いでいる。ミャンマースポーツ・体育委員会は「ミャンマースポーツ—世界制覇」をスローガンに掲げスポーツを強化している（平成29年度調査報告書 ASEAN地域におけるスポーツニーズ調査研究フェーズ、2017）。特に育成年代のミャンマースポーツの中でサッカーが最も好まれている。しかしながら、ミャンマーにはスポーツやトレーニング活動をしたいと思っている青少年が数多くいるものの、時間、施設、スポーツ用具、コーチが不十分であり、特に組織的なトレーニングを行えるコーチはごくわずかしかない（日本スポーツ協会、2017）。

ミャンマーサッカーの歴史を辿ると1880年代に英国人のサッカークラブチームの練習を見て興味を持った現地の若者たちが見よう見まねで行ったのが始まりであるとされている。その後、1894年には国内で多くのサッカーの試合が行われるまでになり、サッカーは非常に早い速度で広がり定着した（宇佐美、2002）。

現在のミャンマーサッカーは、最新の国際サッカー連盟（Fédération Internationale de Football Association：以下FIFAとする）ランキング（2021年11月19日）148位である（最新FIFAランキング、online）。これまでワールドカップ本大会に出場したことはなく、2018 FIFAワールドカップロシア大会は、アジア2次予選で敗退した。ただし、1960年代にはアジアレベルで好成績を残しており、1968年のAFCアジアカップで準優勝であった。かつてA代表が参加していたアジア競技大会では、1966年と1970年に2連覇を果たすなど、東南アジアの古豪として知られている（東南アジアの古豪、online）。また、国内でのトップディビジョンのリーグとしては1996年に創設されたミャンマー・プレミアリーグが存在していたが、ヤンゴンにクラブが集中していた上に、官公庁が母体のクラブが多数を占めており、ミャンマーのサッカーファンには不評だった。これを受けて、2009年3月にヤンゴンを含め8つの地方のクラブからなるプロリーグが創設された。初

年度である2009年はミャンマー・ナショナルリーグ・カップとして開催された。リーグが開幕した2009年度以降、優勝クラブにはアジアサッカー連盟 (Asian Football Confederation:以下AFCとする) プレジデントカップ出場権が与えられていたが、2021年時点で優勝クラブはAFCチャンピオンズリーグ・グループリーグ出場権が、準優勝クラブにはAFCチャンピオンズリーグ・予選 (グループリーグへ進出できなかった場合はAFCカップ・グループリーグ) 出場権が与えられる。2019年シーズンのミャンマー1部リーグは全国リーグとなっており、ミャンマー全土から12クラブが参加している。このミャンマーリーグに日本選手も過去に内田昂輔選手をはじめ、22名所属していた経緯がある (ミャンマーリーグで活躍する日本人サッカー選手, online)。また、日本サッカー協会 (Japan Football Association:以下JFAとする) とも密接な関係があり、2012年8月27日、日本プロサッカーリーグ (Japan Professional Football League:以下Jリーグとする) とパートナーシップ協定を締結した (Jリーグ・アジアへの展開, online)。その後、2012年9月にA代表、女子代表が大阪堺市にあるJ-GREEN堺でキャンプを行った。最近では2018年7月にU-18代表チームが8月にベトナム・ホーチミンにて行われるAFF (ASEANサッカー連盟) U-18ユース選手権2019に向けたチーム強化、調整で実施した。これまでミャンマーサッカーチームは過去に8回、A代表、女子代表のみならず、育成年代やフットサルチームなど多くのカテゴリーが日本サッカーとの交流を続けている (JFA国際交流・アジア貢献活動, online)。日本とミャンマーサッカーの関わりは深く、実は日本はかつて、ビルマからサッカーを教わったことがある。といっても、たとえばJFAの支援によるものなどではない。今からおよそ100年前、たまたま日本に留学していたたった一人のビルマ人青年によるものだった。その指導によって日本のサッカーはプレースタイルの基盤が築かれ、飛躍的な進歩を遂げることとなった (ミャンマーと日本の知られざるサッカーの絆, online)。

これまでミャンマーサッカーでの研究は、松山ら (2020) のアジア育成年代サッカーの実態を把握するために、ミャンマーサッカー育成年代のデフサッカーに着目して調査を行うことを目的とした研究がある。その結果、アルビレックス新潟ミャンマーサッカースクールが立ち上がり、地元サッカー選手にとって大きなやりがいと楽しくサッカーを行っていることが明らかになった。野田ら (2018) によるスポーツ・ビジネスの多様な展開：アルビレックス新潟ミャンマーサッカースクールの事例分析を目的に行った研究がある。その結果、ミャンマーサッカースクールは、どちらかといえば余暇充足型の事業であり、かつ、アルビレックス新潟やアルビレックス新潟シンガポールとの深い関わりを考えると、連続体として競技志向型の組織の一部にも属する。ゆえに、その実践が「楽しさのスポーツ」モデルに合致しつつ、「パワースポーツ」モデルにもあてはまるものとなっていることが明らかになった。こうしたミャンマーとの深いかわりの中で、現在のミャンマーサッカーのレベルを知り、これからもお互い切磋琢磨していく中で、ミャンマーサッカートップレベルチーム選手の競技力向上に関する研究は、非常に意味のある研究である。

そこで、本研究では、2018年シーズンミャンマーサッカー史上初の国内3冠を達成し、代表チ

ームの主力選手が多く所属している国内トップレベルチーム選手の心理的競技能力診断検査 (Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes : 以下DIPCA.3とする) を実施した。また、日本サッカー選手の競技レベル別にみたDIPCA.3の分類比較から考察することを目的とした。

2. 研究方法

2.1. 調査内容

研究者本人がミャンマー・ヤンゴン市に出向き、クラブのスタッフに調査の目的などを簡潔に説明し、DIPCA.3を行った。

2.2. 調査対象

ミャンマー・ヤンゴン市にあるトップレベルのサッカーチーム選手26名を対象に実施した。

2.3. 調査期間

2019年8月15日の計1日間実施した。

2.4. 統計処理

全ての統計にはIBM SPSS Statistics 21を使用して度数分布分析を行った。

3. 結果

3.1. ミャンマーと日本サッカー選手の競技レベル別にみたDIPCA.3の分析結果

ミャンマーは、日本サッカー選手の競技レベル別にみたDIPCA.3 (Jリーグ・JFL/地域リーグ・都道府県リーグ) の分類比較から (堀野, 2021), 総合得点では、JFL/地域リーグレベルの中間に属していた (表1)。

表1. ミャンマーと日本サッカー選手の競技レベル別にみたDIPCA.3の分析結果 (堀野, 2021)

心理的競技能力	忍耐力		闘争心		自己実現意欲		勝利意欲		自己コントロール		リラックス		集中力		自信		決断力		予測力		判断力		協調性	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
JFL/J	16.3	3.6	18.0	4.1	17.2	3.7	17.4	3.4	16.1	3.4	15.3	3.8	17.1	3.6	15.9	3.7	15.2	3.4	13.9	3.4	13.9	3.1	17.5	3.8
JFL/地域	15.3	3.9	17.8	4.0	16.4	3.8	15.9	3.8	16.0	4.1	14.9	4.4	16.8	3.7	14.5	3.6	14.3	3.2	12.0	3.2	12.4	3.5	16.4	3.7
都道府県	15.4	3.6	17.4	4.4	14.9	3.2	15.7	4.0	16.8	3.5	16.5	4.0	17.5	3.5	13.9	3.6	14.7	3.6	13.2	3.4	13.7	3.5	17.4	3.7
ミャンマー	17.5		19.1		18.0		15.6		19.8		10.6		10.7		17.7		15.9		14.9		16.0		19.0	

3.2. ミャンマーと日本におけるサッカー選手のDIPCA.3の比較

ミャンマーは、12因子別から比較すると忍耐力、闘争心、自己実現意欲、自信、決断力、予測力、判断力、協調性がいずれのカテゴリーレベルと比較しても高数値であった。しかしながら、勝利意欲、自己コントロール、リラックス、集中力が低数値であることが明らかになった (図1)。

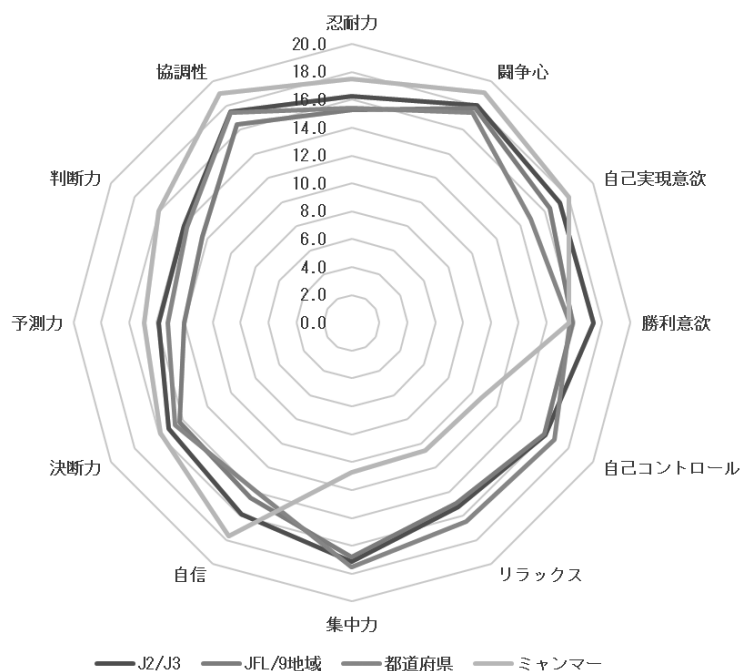


図1. ミャンマーと日本におけるサッカー選手のDIPCA.3の比較

4. 考察

4.1. ミャンマーと日本サッカー選手の競技レベル別にみたDIPCA.3の分析結果（総合得点）

ミャンマーは、日本サッカー選手の競技レベル別にみたDIPCA.3（Jリーグ・JFL/地域リーグ・都道府県リーグ）の分類比較から（堀野，2021），総合得点では、JFL/地域リーグレベルに属していた。日本の中では、日本フットボールリーグ（JAPAN FOOTBALL LEAGUE:以下JFLとする）は、Jリーグの次のカテゴリーであり、企業チーム、Jリーグ入会を目指すクラブ、地域のアマチュアクラブなど、さまざまな人々が関わり、いろいろなチームがしのぎを削っている（日本フットボールリーグ，online）。ミャンマーは、日本のJリーグの次のカテゴリーのレベルに属していることが分かった。

また、ミャンマー代表は最新のFIFAランキング（2021年11月19日）148位で前回発表時より3位順位を下げている。また、ミャンマー代表はAFCに加盟しており、FIFAランキングはアジアサッカー連盟内で27位である。一方の日本代表は最新のFIFAランキングで26位で前回発表時より2位順位を上げている。また、日本代表はAFCに加盟しており、FIFAランキングはアジアサッカー連盟内で2位である（最新FIFAランキング，online）。このことから、ミャンマーは、日本のJFLレベルであり、代表レベルでもかなりの差があることが明らかになった。

4.2. ミャンマーと日本におけるサッカー選手のDIPCA.3の比較（高数値）

DIPCA.3の結果、忍耐力、闘争心、自己実現意欲、自信、決断力、予測力、判断力、協調性がいずれのカテゴリーレベルと比較しても高数値であった。

ミャンマー人の性格的側面から、陽気で明るく、非常に真面目で優しいとされている。「自由奔放」と言った東南アジアの印象とは違い、先生やコーチ、目上の人の言ったことを守る性質を持っている（ミャンマーサッカーの若手育成, online）。また、ミャンマー人は、不満があっても直接相手におつける方ではない。年上を敬う、上司・目上の人の言うことには従うという国民性なので、嫌なことでも我慢する。日本人でも、直接文句を言わずに抱え込んだりしがちだが、ミャンマー人も同じような傾向にある（ミャンマー人の性格や特徴, online）。このことから、日本と比較して、忍耐力や協調性が高いと考えられる。

サッカーの側面から、2021年10月30日にアジアU-23予選開幕戦で中国の台北チームを制したミャンマーチームのU-23監督のホルヘ・ウィンストン氏は「選手全員が勝とうとし、準備の短い期間にベストを尽くしてくれたことを誇りに思っていた。」と語っていた（ミャンマー代表, online）。また、現在においてもミャンマー代表の監督であるラドゥロピッチ氏は「ミャンマーの選手は粗削りだが、才能ある選手もいる。近い将来、アジアでトップクラスになる期待が持てる」と述べている（朝日新聞, online）。アジア貢献事業として2018年5月から2019年8月までミャンマーアカデミー（マンガレー）監督であった古賀琢磨氏によるとストロングポイントは個人スキルの高さ、こちらの要求に応えようとする素直さである。個人そしてチームとして成長すれば、この国のサッカーはとても大きく飛躍する可能性を秘めている。また、アカデミー全体で課題であった、普段のトレーニングを通してコンビネーションによる突破や組織的な守備を構築してきたと考えられる（アジアのピッチから～JFA公認海外派遣指導者通信, online）。このことから、選手全員が勝とうとする姿勢である闘争心、自己実現意欲がある。また、ストロングポイントとしての個人スキルの高さなど才能ある選手が多数存在することでの自信、普段のトレーニングを通して協調性を高めるコンビネーションによる突破や組織的な守備を構築し、決断力、予測力、判断力が高くなったと考えられる。それゆえ、将来、活躍が期待出来そうな選手が多く存在していると考えられる。

4.3. ミャンマーと日本におけるサッカー選手のDIPCA.3の比較（低数値）

DIPCA.3の結果、勝利意欲、自己コントロール、リラックス、集中力がいずれのカテゴリーレベルと比較しても低数値であった。

ミャンマー人の性格的側面から、日本人以上に感情を表に出さず、常に落ち着いている印象である。そのため、性格的に繊細なところがあり、傷付きやすくプライドが高く見栄っ張りなところがあるため、自己をコントロールする能力に欠けているところがあるとされている（ミャンマーの外国人労働者、技能実習生の特徴や性格, online）。また、ミャンマー人は、真面目で人に優しい方が多く、人当たりが良い。仕事に関しても、しっかりとルールや期限を守って仕事に取り

組む性格である。そのため、真面目で人に優しく、人当たりが良い反面、サッカーの試合になるとその優しさから勝利に対する意欲も低くなってしまいがちになることも考えられる。更に、しっかりとルールや期限を守って仕事に取り組む性格であるため、リラックスする時間を取ることなく、時折、集中力を欠くことも考えられる（ミャンマー人男性・女性の性格や特徴, online）。このことから、日本と比較して自己コントロールやリラックスが低いと考えられる。

サッカーの側面から、ミャンマーの中では国民のスポーツ実施率等統計（性別、年代別）に見るとサッカーが最も好まれているにも関わらず（日本スポーツ協会, 2017）、これまで強化育成する施設が整っていなかった。そのため、選手が具体的な目標を設定し、世界と戦える勝利意欲が備わっていなかったと考えられる。また、ポテンシャルが高く真面目である反面、局面の状況に関係なく感覚のみのプレーであることや、自分で判断することが欠如している。（ミャンマーサッカーの若手育成, online）。このことから、試合中での自己コントロール、リラックス、集中力の欠如につながっていると考えられる。今後は、サッカーを行う上で、原理原則を整理し、ハイプレッシャーの中で状況に応じて自ら判断するシチュエーションをトレーニングで作り出せるかどうか課題である。

5. まとめ

本研究では、2018年シーズンミャンマーサッカー史上初の国内3冠を達成し、代表チームの主力選手が多く所属している国内トップレベルチーム選手のDIPCA.3を実施した。また、日本サッカー選手の競技レベル別にみたDIPCA.3の分類比較から考察することを目的とした。

その結果、以下の内容が明らかになった。

5.1. ミャンマーと日本サッカー選手の競技レベル別にみたDIPCA.3の分析結果（総合得点）

ミャンマーは、日本サッカー選手の競技レベル別にみたDIPCA.3（Jリーグ・JFL／地域リーグ・都道府県リーグ）の分類比較から（堀野, 2021）、総合得点では、JFL／地域リーグレベルに属していた。このことから、ミャンマーは、日本のJFLレベルであり、代表レベルでもかなりの差があることが明らかになった。

5.2. ミャンマーと日本におけるサッカー選手のDIPCA.3の比較（高数値）

DIPCA.3の結果、忍耐力、闘争心、自己実現意欲、自信、決断力、予測力、判断力、協調性がいずれのカテゴリーレベルと比較しても高数値であった。

ミャンマー人の性格的側面から、陽気で明るく、非常に真面目で優しいとされている。また、ミャンマーの人は、不満があっても直接相手にぶつける方ではない。年上を敬う、上司・目上の人の言うことには従うという国民性なので、嫌なことでも我慢する。このことから、日本と比較して、忍耐力や協調性が高いと考えられる。

サッカーの側面から、選手全員が勝とうとする姿勢である闘争心、自己実現意欲がある。また、

ストロングポイントとしての個人スキルの高さなど才能ある選手が多数存在することでの自信、普通のトレーニングを通して協調性を高めるコンビネーションによる突破や組織的な守備を構築し、決断力、予測力、判断力が高くなったと考えられる。それゆえ、将来、活躍が期待出来るような選手が多く存在していると考えられる。

5.3. ミャンマーと日本におけるサッカー選手のDIPCA.3の比較（低数値）

DIPCA.3の結果、勝利意欲、自己コントロール、リラックス、集中力がいずれのカテゴリーレベルと比較しても低数値であった。

ミャンマー人の性格的側面から、常に落ち着いている印象である。そのため、性格的に繊細なところがあり、傷付きやすくプライドが高く見栄っ張りなところがあるため、自己をコントロールする能力に欠けているところがあるとされている。また、ミャンマー人は、真面目で人に優しい方が多く、人当たりが良い。仕事に関しても、しっかりとルールや期限を守って仕事に取り組む性格である。そのため、真面目で人に優しく、人当たりが良い反面、サッカーの試合になるとその優しさから勝利に対する意欲も低くなってしまいがちになることも考えられる。更に、しっかりとルールや期限を守って仕事に取り組む性格であるため、リラックスする時間を取ることなく、時折、集中力を欠くこともあると考えられる。

サッカーの側面から、これまで強化育成する施設が整っていなかった。そのため、選手が具体的な目標を設定し、世界と戦える勝利意欲が備わっていなかったと考えられる。また、ポテンシャルが高く真面目である反面、局面の状況に関係なく感覚のみのプレーであることや、自分で判断することが欠如している。このことから、試合中での自己コントロール、リラックス、集中力の欠如につながっていると考えられる。

引用参考文献

朝日新聞（今夜はサッカー、時々ラッパーGK勝利導くミャンマー）

<https://www.asahi.com/articles/ASM993DVBM99UHBI00J.html>（2020年5月13日参照）

外務省

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/myanmar/data.html>（2019年12月6日参照）

JFA国際交流・アジア貢献活動

https://www.jfa.jp/social_action_programme/international_exchange/training_camp_hosting.html（2021年11月24日参照）

Jリーグ・アジアへの展開

<https://aboutjleague.jp/corporate/global/asia/>（2021年11月24日参照）

ミャンマー代表

<http://www.the-mff.org/>（2021年11月26日参照）

ミャンマーリーグで活躍する日本人サッカー選手

<https://equalizer11.com/2019/03/31/myanmar-league-2019/>（2021年11月24日参照）

ミャンマー人の性格や特徴

<https://corp-japanjobschool.com/what-myanmar>（2021年11月29日参照）

ミャンマーについて

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000004.000037922.html> (2020年5月6日参照)

ミャンマーサッカーの若手育成

<https://blog-newlife.com/blog-title/> (2021年11月26日参照)

ミャンマーと日本の知られざるサッカーの絆

<https://tripping.jp/asean/myanmar/53667> (2021年11月24日参照)

ミャンマーの外国人労働者、技能実習生の特徴や性格

<https://amazing-human.jp/myan-personality/> (2021年11月29日参照)

ミャンマー人男性・女性の性格や特徴

<https://kirari-medianet/posts/2299> (2021年11月29日参照)

日本スポーツ協会 (2017) 平成29年度調査報告書 ASEAN地域におけるスポーツニーズ調査研究フェーズ『スポーツ庁国庫補助事業』年, pp.96-107.

日本フットボールリーグ

<http://www.jfl.or.jp/jfl-pc/view/s.php?a=1> (2021年11月29日参照)

野田光太郎, 秦美香子 (2018) スポーツ・ビジネスの多様な展開：アルビレックス新潟ミャンマーサッカースクールの事例分析」花園大学文学部研究紀要, Vol.50, 63-82.

最新FIFAランキング

<https://fifaranking.net/ranking/> (2021年11月29日参照)

東南アジアの古豪

<https://www.soccer-king.jp/news/japan/national/20190910/977902.html> (2020年5月6日参照)

内田勝巳 (2016) ミャンマーの地域特性と格差」『撰南経済研究』Vol.6, No.1-2, pp.63-84.

宇佐美隆憲 (2002) スポーツにおける東南アジアの経済発展と都市化」『アジア・アフリカ文化研究所研究年報』Vol.53, No.102, pp.53-64.